石川県能美市

愛犬アドヴィン号

毎田至子（87歳・金沢市）

戦争が始まってすぐ父は、我が家は女児ばかりで、出征兵士を送る事は出来ぬから、軍用犬を育てご奉公しようといった。今思うともってのほかの心情だが、当時は、戦場でお国のため華と散ることが最高の名誉という国民感情であった。女性も銃後の守りを固め、心身共に貢献していたのである。

父はご近所の犬の専門家といわれていたM氏に世話して頂き、アドヴィンが我が家へきた。体高30センチの子犬だった。

家族となったアドヴィンは、私達と同じ食物を喜んで食べてくれた。家は米を作っていたがほとんど供出なので、銀めしは月二回だ。じゃがいも、さつまいも、かぼちゃなどの代用食が主だった。副菜は、家でとれた野菜。小川でとったふな、どじょうなど。いなども多く、ゆでて干し、からからになったら粉にしてふりかけて食べた。いつもおなかがすいていたので何でもおいしかった。当時の農作業はすべて手作業で重労働であった。

犬も同じだったと思う。父はよくしつけていた。「待て」というと、どんなにおなかがすいていても待つおりこうな犬だった。成長は早く、体高65センチになった。血統書付きの犬である。

シェパードはドイツが原産。ドイツは日本の同盟国だった。何といってもかっこよく、父はよくアドを連れて歩いた。私も時々お供した。M氏の家にもドーベルマン・ピンシャーという犬がいた。どちらも使役犬（労働犬）の仲間で、ドイツ産だそうだ。M氏は、軍用犬を世話した責任を感じ、時々訓練にもきて下さった。専門的なことは軍隊へいってから指導するとのことで、家では基礎だけでよいといわれた。家の田畑の労働に使ってもよいとお許しもでていた。

アドヴィンは成犬となり、よく働いてくれた。主に稲運びの車を引く力になってもらった。粗食にも堪え、シェパード本来のりりしい美しい姿となったアド。話しかける時は人間と同じである。アドは、少し首を右にかたむけて聞くしぐさが何とも可愛い。

稲刈後の田で棒を放って取ってこさせたり、障害物を乗りこえる訓練もよくしていた。驚いたのは臭覚の敏感さだ。アドヴィンが一番に尊敬していたのは父で、父が仕事から帰ってくると、はるか300メートル以上でもわかるのか、姿がみえなくても尾をふり、父の方向をじっと眺めて待つのである。

とうとうその時がきた。召集だ。兵隊さんがアドの様子を見にこられ、合格したらしい。私は学校にいっていて留守にしていた。

その日、母はどこで工面してきたのか、牛乳や牛肉を料理し、アドに食べさせた。赤飯も少し炊いた。なぜかアドは残した。

別れの日、近所の人もM氏も見送りにきた。

金沢の護国神社へ召集された犬たちが集まり、壮行会があるので父と私がいった。アドは先に兵隊さんが迎えにきて連れていった。

父・毎田長太郎さんとシェパード、アドヴィン。

人なつっこかったアドヴィンと、田仕事姿の父。

護国神社へつくと、アドヴィンは兵隊さんと一緒にいた。おなかに日の丸の旗が巻かれていた。雄々しかった。神社の石段の所に飼い主と、それぞれの犬たち6組が並び、記念撮影をした。父は真中にアドヴィンと並んでいた。ひいきめか、アドが一番立派に見えた。犬たちには牛乳と食事が与えられ、上官のあいさつがあった。「立派な軍用犬に育ててくださって本当にごくろうさまでした。有難うございます。私共は今後愛情をもって訓練に励み、皆様のご期待にそえるよう努力します。この犬くんたちも皆さんのご恩は決して忘れないでしょう。一応内地で訓練し、そのあと各戦場で働くことになります。きっと国のため活躍してくれることを確信致しております」といった言葉だった。

「アドヴィンや、身体に気をつけてがんばれや」

父は我が息子にいうようにほほずりし、なぜまくった。父のほほが光った。私も涙がとまらなくなった。と、アドの目に光った水玉を見た。

ほかには、別れがいやなのか足をふんばり、兵隊さんも飼い主も困っていた犬も一匹いた。

またいつまでも飼い主が兵士に犬を渡そうとしない人もいて、その気持ちは痛いほどよくわかった。

父は、「いつまでもこうしていても同じや。きっぱりお別れしよう。兵隊さんどうかよろしく」と深々と頭をさげた。私も最敬礼した。

優しそうな兵隊さんは、私達に敬礼され、アドを連れ去った。

［付記］

一九四二（昭和十七）年、アドヴィンは中支（編注：中国中部地方）へ渡り活躍した。「障害物訓練で一位をとりました。偵察犬として優秀な成績をあげています」と、